

の関税も撤廃される見込みであり、同地域の飛躍的経済発展が期待できる。来年、ミャンマーはこの議長国となる事から首都ネピドー近辺ではホテル等関連施設の建築ラッシュで湧いていた。

3 縫製工場見学

1997年のアジア通貨危機でインドネシア展開の衣料製造業（台湾、香港）がミャンマーへ移転し、縫製産業は急激に発展した。しかし2003年7月の米国の経済制裁発動以後、同産業は壊滅的大打撃を受けた。近年の民主化進展と中国展開企業の移転（賃金上昇、ストライキ頻発）の動きも有り、縫製産業は復活しつつある。今回ヤンゴン市近郊のある縫製工場を訪問し、社長夫人や生産部長の案内で工場を見学させてもらった。

- (2) 従業員
班長クラスには韓国で働いた経験のある従業員もいる。勤勉意欲は高く業務には従順であるが従業員の定着率は日本と比較すると低いようである。これは腕を磨いて会社を変えようとする事によって俸給がアップする欧州の慣習（かつてはイギリスの植民地）が影響しているものと思われる。
- (3) 品質等
ミャンマーの縫製技術は東南アジアの他国「バングラデシュ、インドネシア、ベトナム等」と比較しても品質は割が良い方である。ただ生産性は必ずしも高くはないが今後の向上が十分に見込まれる。生産部長部長は「今後当工場も設備拡大や縫製技術の改善を図り生産効率を上げて行く予定である」と旨、説明してくれた。
- (4) 輸送コスト
日本への輸送は通常船便（シンガポール港でコンテナ載せ替え）で往復2ヶ月間を要し、Tシャツ1枚の単価は約120円程度である。航空便の場合は単価240円であり、流通上の時間とコスト高が問題である。他の輸送手段としてはベトナム経由の陸路「ミャンマーのモラミヤインからタイ及びラオスを經由し、ベトナムのダナン港」や「ミャンマー

素材はインドネシアやタイから持ち込み、現地で裁断（型紙）し、ミシンを使って縫製し、日本や中国に出荷している。従業員は約400人の殆どが女性従業員、賃金は月5万チャット〜7万5千チャット「7月19日現在為替レート1円=9.77チャット」(月給5千円〜7千6百円)程度である。これはアセアン諸国の中でも最も低い賃金である。

のダウエイからタイ及びカンボジアを經由しベトナムのホーチミン港」を併用した船便の方法等もあるが「国境での通関手続きがワンストップになっていない事」や、「積み替えを要する区間」、「道路整備上の問題」等の問題も有り、また船便が安定的に運用されているようである。

(5) インフラ等の問題

電力供給が不安定であり、停電時には自家発電を使わざるを得ない。これは、我々の滞在中にも市内の送電がシャットダウンする事態を何度か体験したが、復旧は比較的早々（約20、30分程度）行われていた。

4 国立高校(小、中、高) 訪問

校長先生(女性)自ら学校案内をして戴き、主要な先生方共、意見交換をすることができた。「教職員は94人全員が女性である」との説明を聞いて、ミャンマー女性の旺盛な向学心と勤勉な姿勢には驚かされた。

(1) 教育制度

現在のミャンマー学校教育制度は、基礎教育と高等教育から成っている。基礎教育機関には、初等教育「小学校5年間(2000年から義務教育実施)」「中等教育「中学校4年間、高等学校2年間および各種職業学校」がある。高等教育機関には、短期大学、

大学がある。各学校はすべて政府の統括下にあり、教育方針や教育課程などは教育省が管轄している。校長先生から「将来、中学課程(4年間)の義務化に向けた動きがある」と旨、確認できた。なお、ミャンマーは「5-4-2の11年教育」で12年に満たない。日本の大学に進学する場合は文部科学大臣の指定による「準備教育課程(大学の留学生別科や特定の日本語学校)」を終了した場合に入学資格が認められている。

(2) 教育環境等

パソコン教室も1室整備され(OSはWindows XP)ていた。中学生には「基本的操作」、高校生には「ハードウェア等の基礎的事項」について実習教育を開始しているという。このような教育設備が整った学校はミャンマーではヤンゴン市内等の数校だけに過ぎないようである。我々が授業中の教室を訪問する度に担当教員と生徒全員が窓側に振り向いて合掌し、「ミンガラバ(こんにちは)」と元氣良く挨拶してくれた。私は学校における道徳教育や家庭の躾教育がしっかり行き届いていると感じた。親は教師に協力的で学校運営行事などPTA活動にも参加している。この国では特に僧侶と

教師は大変尊敬される立場にあり、やりがいのある仕事のようなのである。

(3) 就学率

校長先生から「小学校(5歳〜9歳)の就学率は95%程度である。しかしながら中学校(10歳〜13歳)の就学率は45%程度に下がる。これは地方に行けば行く程顕著である」と旨、説明を受けた。ミャンマーの関連情報を見るにつけ私は「若者の多くが近隣のタイやマレーシア、シンガポールに出稼ぎで出国し、働き手の一部を生徒に頼らざるを得ない事情も影響している」との思料する。

(4) 教育

授業はミャンマー語(高校の数学と科学の授業は英語)で行われている。授業時間は、それぞれ小学校1時間30〜35分(最低週40時間)・中学校、1時間45分(最低週35時間程度)である。当学校では午前中は低学年、午後からは高学年に区分して教育を実施している。授業料については、小学校は無償、中・高等学校では、有償で学年順に学費も上がる。毎月の学費は、6年生は5000チャット、11年生でも僅か10000チャット(約1020円)であり、殆ど無料に近いと言える。その他の経費として教科書費、文房具費、学校